

女兒雑誌における「理想の女性」像の変遷

愛知学泉大学 西原麻里

1. 目的

本報告は、「理想の女性」像の代名詞であるプリンセスというモチーフから、現代の女兒に対する社会的規範のあり様とその変遷を明らかにすることを目的とする。そのために、2000年代以降に発行された女兒雑誌をもちい、記事内容の比較分析をおこなう。それを通じて、現代の女兒向け文化において描き出される「理想」や「憧れ」、つまり望ましい女性像のあり様がどのようなメディア言説空間によって構成されているのかを考察する。

2. 方法

日本で発行されている、プリンセスに特化した女兒雑誌の記事内容の分析をおこなった。分析対象雑誌は『KAWADE 夢ムック ディズニープリンセス』2002-3年発行号の7冊と、その後継誌である『ディズニープリンセス らぶ&きゅーと』2013年発行号の6冊である。2002-3年発行号と2013年発行号の記事を数量的分析・テキスト分析で比較することで、それぞれの時期での言説がどのように構成されているか、またおよそ10年で「理想の女性」像言説がどのように変化したのかを考察した。分析には各誌の目次ページに記載のある記事をもちいた。

3. 結果

分析の結果、2002-3年発行号では女兒だけでなく母親にも語りかけることで、女兒が「幸せな結婚」や「優しくおしとやかな女性」といった古典的なジェンダー規範を学習するように明示化していた。またプリンセスというモチーフを通じて、母親にとって躰をしやすい・望ましい娘となるように促されていた。一方2013年発行号では、読者と同世代のモデルのグラビアやプリンセスのイラストによる髪型や服装のコーディネートといったファッションに関する記事の増加、また記事背景などでの視覚的効果の強調など、視覚的イメージに重点が置かれていた。異性愛や古典的な女性ジェンダー規範に関する言説はおおむね大幅に減少し、代わりに同性の友情や女兒の「自分らしさ」や個性が強調されていた。また母親の存在はほとんど登場していなかった。

4. 結論

日本の女性文化では、プリンセスは女性にとって憧れの代名詞として頻出するモチーフであり(斎藤 1998)、なかでもディズニープリンセスはその代表的な存在である。ディズニープリンセスはこれまで、異性愛と家父長制の規範のもとで男性に従順であり、禁欲的・受動的に振る舞い、心の優しさや素直さが美德とされる女性として描かれると批判されてきた(若桑 2003)。

2013年発行号をみると、テキスト面ではこのような古典的な規範は前景化していない。しかし、ファッションに関する記事などでは容姿の美しさや可愛らしさを強調しているほか、視覚的イメージを採用することで娯楽性を強める誌面づくりなど、女性的な美を第一義とする消費社会へ女兒が能動的・積極的に組み込まれていく仕掛けが施されている。以上から、社会的規範についての明確な語りはみられなくなったものの、視覚性を重視することで自発的に女性らしい美しさをもつ「理想の女性」像を志向していくよう促すメディア言説空間が明らかとなった。

文献

斎藤美奈子,1998,『紅一点論——アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』ビレッジセンター出版局。
若桑みどり,2003,『お姫様とジェンダー——アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』筑摩書房。